

**実践**

## 日本語学校による「外国につながる子どもたち」への学習支援教室 実践報告

## —仙台国際日本語学校の取り組み—

瀬戸稔彦 (仙台国際日本語学校)

佐々木葵 (仙台国際日本語学校)

## 1. 実践の場の特徴

本実践は、発表者の所属する日本語学校で2016年3月から定期的に、過去5回開催した日本語支援を必要とする(外国につながる)子どもたちへの学習支援活動である。日本語学校の設備・教材を使用し、現役日本語教師が学習支援を行う点に特徴があると考えられる。

## 2. 実践の目標

実践の目標は二つ。一つ目は、日本語教育・学習支援を通して地域社会に貢献すること。二つ目は、年少者への教育・学習支援活動を通して教師の教育能力を高めること、である。

## 3. 具体的な実践の内容とその過程

通常の学校経営の合間(長期休暇等)に行わざるを得ず、過去5回とも連続する2~3日間・各日2~3時間の開催とした。市内及びその近郊在住の外国につながる小・中学生を対象としている。内容は、普段の日本語学校としての教育活動の中から、①読み書き指導、②iPad・PCを用いた日本語学習、③日本語の本の多読、④その他(ゲーム、ことば遊び)の4つを選び出し、そこに⑤宿題・自学支援を加えた5つを雛型とし、それらをその子どもに応じて組み合わせている。広報については、他の機関で同様の学習支援教室を運営している公益財団法人の力を借りている。

## 4. 結果と考察

1回目から4人→3人→5人→12人→6人と一定数の申し込みがあり、また複数回参加している子どももいる(4回目では12人中7人)ことから、参加者やその周囲から一定の評価を得ており、必要性も増してきていると推測する。また活動の前後に上述の公益財団法人の担当者と情報を共有しており、それが子どもたちの所属校や地域の外国人支援団体など他機関へとつながっており、間接的な形でも参加者やその周囲に貢献しているものと考えられる。また、普段の教育活動のノウハウが子どもたちへの学習支援にも役立ち、その逆にこの教室運営を通して得たことが日々の授業に活かしているとも感じる。一方、教師の人数確保と継続的・長期的な学習支援の難しさが課題である。

## 【引用文献】

なし